

I 研究開発の概要

1. 研究開発課題

小学校における「公共性」を育む「シティズンシップ教育」の内容・方法を開発する。そのために各学習分野で育成する「公共性リテラシー」を探究し『学習における「公共性」育成プラン』を作成する。

2. 研究の概要

本校で定義する「公共性」とは「子ども達が友だちと自分の違いを排除せずに、理解し考える力を発揮すること、そして教師達自身が民主主義に基づく社会生活を創る資質・能力を探究し育てる視点をもつこと」である。その目標に向かって授業（学習）を改善する。本校の「シティズンシップ教育」では学習における「公共性リテラシー」を探究する。「公共性リテラシー」は全学習分野において育成する。教育課程は「学習分野」と「創造活動」で編成し、当開発では「学習分野」研究に焦点を当てる。教育課程運用には協力学年担任制と学習分野担任制を併用する。「公共性リテラシー」を育む教育課程は3年次に『学習における「公共性」育成プラン』にまとめる。また、校内研究を教師の学びとして有意義で持続可能なものにするために研究推進のあり方を改善し提案する。

3. 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

① どのような手段を考えているのか

ア 協力学年担任制

個々の教師が他の教師と協力して子どもを育てるという考え方から「協力学年担任制」を採用する。

イ 学習分野担任制

全ての教科（学習分野）で「公共性」を育むことをねらい、子どもの実態から教育内容や方法の研究を具体的に進めるために、「学習分野担任制」を採用する。「協力学年担任制」で安定の基盤をつくった上に教師の専門性を生かして子どもを育てるという考え方である。

ウ 各学習分野で『学習における「公共性」育成プラン』をつくる

全ての学習分野において「公共性」に関する教育内容や適切な方法を抽出し、本校オリジナルの『学習における「公共性」育成プラン』を作成する。学習分野で育む「公共性リテラシー」を明らかにする。

エ 「公共性」を高める校内研究体制を構築する

【授業者が学習指導案を作成する⇒みんなで授業研究を行う⇒自分自身のふり返しを行う→実践記録を書く⇒グループで省察する⇒自分の授業改善に活かす】という自己と他者の対話的研究サイクルを確立する。

② どのような成果を期待しているのか

ア 協力学年担任制

複数の学年担任教師が一人一人の子どもに学習指導と生活指導で関わることによって、子ども側は多面的な見方や価値観にふれることができ、よりどころを得て精神的な安定感につながる。様々な教師の人間性や指導法に触れることができ、異なる価値観や意見に出会い、葛藤をもって考える機会が増えるので「公共性」を育むことへ促進的に働く。

教師の側からすれば、「公共性」の育み方を異分野の視点で考えるチャンスが増え、すでに教師自身が経験的に把握している発達の視点に多様性が加味されて、さらに実践を工夫することができる。

イ 学習分野担任制

教師個々の専門性や特徴を生かすことができるので、学習内容の研究が進む。授業方法に工夫を加えやすくなり、子ども同士が関わりあいながら創造的、専門的に学ぶ機会が増える。また、各学習分野研究が活発になり、「公共性リテラシー」についての議論が進む。

ウ 各学習分野で『学習における「公共性」育成プラン』をつくる

「公共性リテラシー」を6年間の教育課程全体の視野から整理することができるので、当該学習分野で計画的かつ省察を加えながらの教育を行うことができる。

エ 「公共性」を高める校内研究体制を構築する

教師個人では気づかなかった子ども同士の関係の変化や子どもの学びの見取り方を知ることができる。「公共性」や「公共性リテラシー」に関する考え方や授業方法について、他の教師の考えを受けとめて共感的・批判的に試行錯誤することができる。そのことによって、自らの授業実践に工夫を加えようとする意欲が高まる。

(2) 教育課程の特例

教育課程を、「学習分野」（ことば、市民、算数、自然、音楽、アート、生活文化、からだ）と「創造活動」で編成する。

4. 開発する教育課程の特色

① 「公共性」を創る

前回の研究開発（H17～H19）で、右図にあるとおり、協働して学びを生み出す子どもを育てる3つの視点のひとつに「公共性」があることが実践的に確認された。

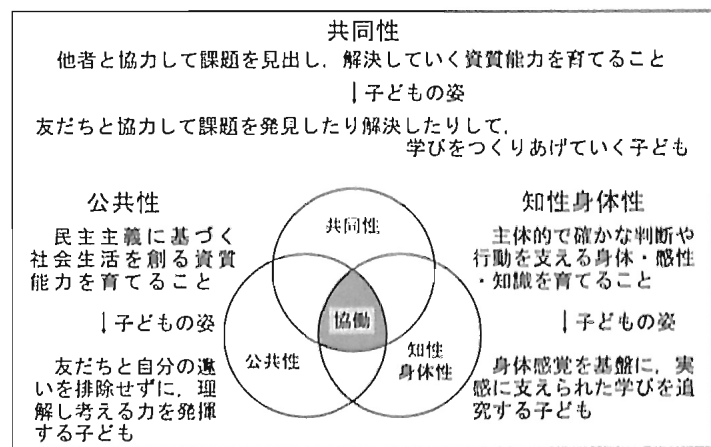
今回（H20～H22）は、特に「公共性」のところに焦点を当てて、小学校教育で育成できることは何か、全教科（学習分野）で内容・方法を開発する。その際、授業改善を基盤として研究を進める。

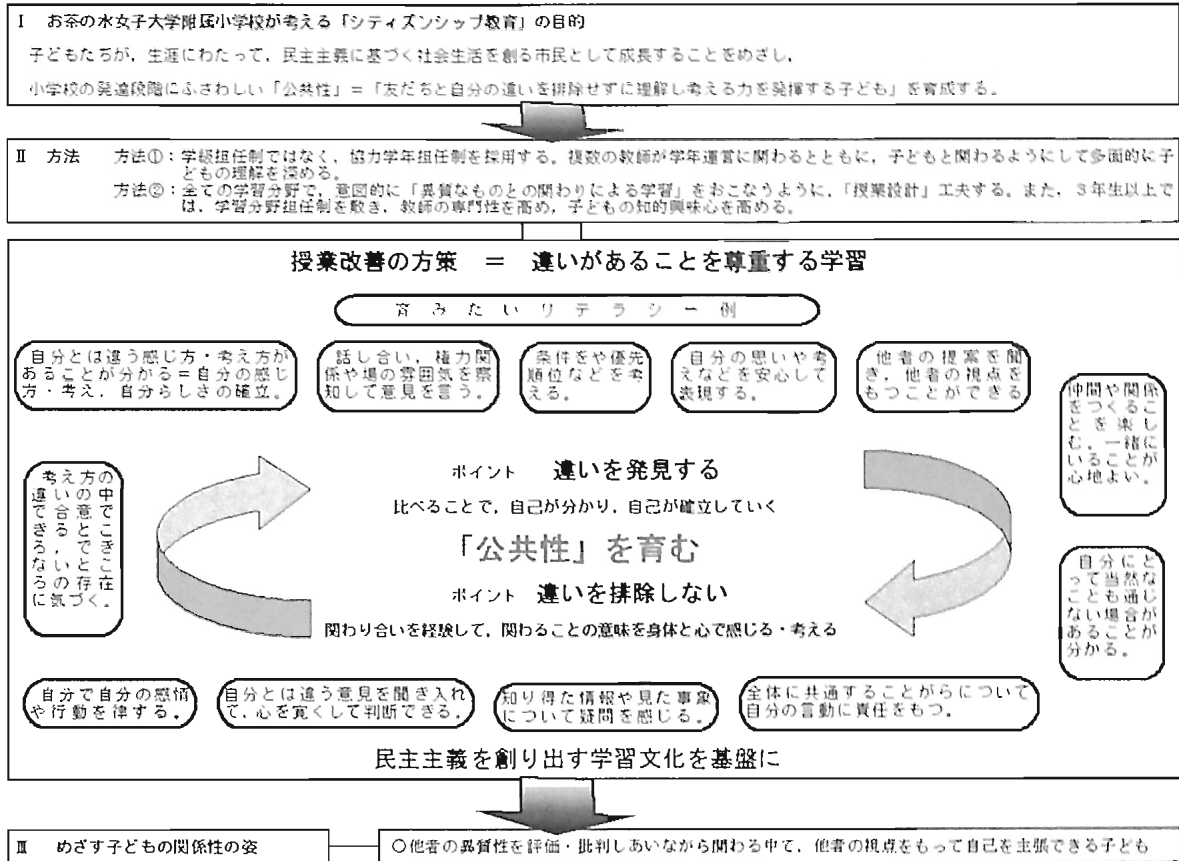
研究の動機は児童の実態や、子どもを取り

巻く現状社会の文化や価値のおき方、学校教育が担うべきこと、教師たち自身が創る教育課程のあり方、などへの問題意識である。一方で、近年のシティズンシップ教育の潮流の中で、本校の教育課程の特色を明確にしていく必要がある。シティズンシップ教育とは、広く、学校教育と社会教育の境界を越えて多様な可能性をもつ研究領域である。国内外の先進的な取り組みを参考にしつつ、本校の開発で担うべきことを探った結果、本校では、学習分野（教科）の授業において「公共性」を高め「公共性リテラシー」を育てる、という立場をとる。

これからの世界・日本を担う子ども達（将来の市民）には、自分や身の回りの人や社会に愛着をもち、もつがゆえに公（パブリック）を良くしたいと考え行動することが求められる。自分の属する社会を理解し、その社会への問題関心をもつだけでなく、自分の役割を理解して社会を育てることも必要である。人は社会をつくり、そして社会によって育てられる。そのような市民として身につけるべき総体の中で、特に、小学校の授業場面で育てたい資質能力を私たちは「公共性リテラシー」と名づけた。民主主義とは、よりよいものを絶えず求める過程である。「公共性リテラシー」を探究し、「公共性リテラシー」に発達段階はあるのだろうか、育成の手立て等、実践的に模索している。本校の「シティズンシップ教育」の現在は、学習における「公共性」を問い、「公共性リテラシー」を育成することである。

協働して学びを生み出す子ども（定義）





② 「公共性リテラシー」の育成

「公共性リテラシー」とは、民主主義を創り出す学習文化を、どの授業にも共通する教室の基盤としてかたちづくることをめざし、機能的リテラシーの政治性（自由と責任・葛藤・せめぎあいや折り合い・討論・参加・少数の不利益など、価値が複数であることをいかにのりこえるか）に注目した資質能力である。

「公共性リテラシー」には、授業をつくる子ども同士や子どもと教師双方を視野に入れた、お互いの関係性を問い直す、という意味がある。

2年次は仮説として全学習分野で共通の「公共性リテラシー」を「共感・賞賛・批判・提案」の要素で考えた。そして各学習分野の特徴を活かして育む「公共性リテラシー」を探究し、『学習における「公共性」育成プラン』作成に着手した。

どの学習にも共通する「公共性リテラシー」の要素

- 共感→いっしょにいる心地よさ、寛容さ、安心安定、そうだねと寄り添う気持ちの表出など
- 賞賛→相手の考えや作品の良さを見つける、比べる、語彙、少数派の長所を指摘する思考など
- 批判→異なる立場や表現を否定しない慎み、違いを楽しむ態度と思考、考えるための知識など
- 提案→こわす批判より創る提案にもっていく創造的思考、責任意識、意思決定、価値判断など

